

# 『医療の質の保証——ブリストルの遺産』

## 連載にあたって

幕内 晴朗 近藤 丘

東京医大事件の報告書が出されて1年が経過した。その報告書を読んだときまず感じたことは、医療者側にとって非常に厳しい内容ということである。それまでわが国では、100人の医師のうち99人までは犯さないような重大なミスでなければ問題はないと考えられていたのに対し、東京医大の事件では明らかなミスはないのに責任が追及されたからである。

今月から6ヵ月にわたって掲載する本連載の著者は、東京医科大学病院心臓手術調査委員会の委員長を務められた古瀬彰先生である。古瀬先生はそれ以前にも横浜市大の患者取り違え事件の外部調査委員など、数々の事件に直接・間接にタッチした経験を有する。さらに著者は、2001年7月に公表されたブリストル病院事件の報告書を読み、「医療の質」をどのように保証するかということが東京医大事件の本質であると認識するにいたったのである。ブリストル病院事件とは、英国にある病院の乳児心臓手術の成績が著しく不良であったのに長年放置され、結果的に多くの患児を死亡させて大問題となったもので、英国政府は特別調査委員会を設置し約3年にわたって詳細な調査を行わせた。実際の報告書は500ページを超す長大な文書であるが、古瀬先生はそれを要領よくまとめており、むずかしい統計学の話もわかりやすく解説されている。本連載はこの報告書を基礎に、これまで著者が経験した数々の事件をたどりつつ、病院管理者の責任から若手医師の教育まで

幅広く解説しており、わが国の医療関係者に医療安全に対する意識改革を迫るものとなっている。

本連載を読むと、東京医科大学病院心臓手術調査委員会のメンバーがきわめて周到的な準備を行ったうえで、深い洞察力をもって先の報告書を作成したことがよく理解できる。さらに、医療に従事するものは常に患者の立場に立ち、医療の質の保証の重要性を深く自覚することが何よりも大切であり、その点でわれわれの意識が欧米諸国の基準からどれほど遅れているかを痛感させられる。わが国の病院機能評価でも、医療の質やその向上に対する努力を評価する項目が入っているが、実際にこれをきちんと行っている施設はまだきわめて少数に限られるであろう。

本連載は従来の学術医学雑誌の範疇を多少はみ出る内容であり、本誌に掲載する必要性については十分検討した。その結果、医療をとりまく状況はここ数年をとっても厳しい方向に大きく変わりつつある中、今後の医療を遂行するにあたっての道しるべともなるべき本連載を、とくに高リスクな手術を扱うことが多い胸部外科領域の専門誌で扱うことは適切であり、時代の要請にもかなっていると判断した。ぜひ熟読されることをおすすめしたい。本連載の内容を読者がよく理解し、明日からの医療の改善に少しでも役立てていただければ幸いである。